

# 行動規準と逸脱行動

井 垣 章 二

社会病理現象は、それが「人間行動」の次元に移されるとき、すべて逸脱行動なる名のもとに把握されるであらう。この意味で逸脱行動は社会病理学に於ける重要な基礎概念の一つと考えられる。この小論は、人間行動を正常と異常もしくは一致と逸脱との二つの類型に二分せしめる測定基準として行動規準なる概念をとりあげ、それに基づいて逸脱行動の特質とそれに関連する諸問題の考察を試みたものである。その主題の課題とするところは、もし社会が逸脱行動への圧力というものを有しているとすれば、何故ある一部の個人が逸脱し他はしないのであるか、更に現代社会が以前にも遙かに増して逸脱行動を顕発せしめているとすれば、現代の社会的文化的構造に付帯する逸脱行動へのかような圧力の源泉は何であるかという問題である。

## I

非行・犯罪・自殺・精神病等に関する最近の諸研究は、それら人間行動に於ける病理的、逸脱的諸現象が常に社会構造乃至文化構造との深い関連性のうちに捉えられねばならないことを明かにしている。故に、逸脱行動や不適應現象の究明に際しては、社会構造乃至文化構造そのものの特性が、特に人間行動一般との関連のうちに先づ明かにされることが必要である。

### 行動規準と逸脱行動

## 行動規準と逸脱行動

人間に混乱や相互の衝突を最少限にとどめ共同生活を可能ならしめるものは共通な文化の分有である。<sup>(1)</sup> この意味は社会的接触交渉を可能ならしめる諸個人の行動の相互的予見可能性又は期待 (mutual predictability or expectation) が共通な文化の分有に基いているということである。ここに文化は基本的なものに帰すれば禁止と命令 (proscription and prescription) であるとせられる。即ち「文化は吾々が何を欲し、何を欲しないかを吾々に告げる」と共に「これら望まれたる目標」対象 (end-objects) の獲得にあつて、吾々がどのように盡力しなければならないか、同時に如何なる方法において進めてはならないかを指示する」ものである。<sup>(2)</sup> R. K. Merton は、社会の全成員に正当な目標として提出される「文化的に規定された目的、目標及び関心 (culturally-defined goals, purposes and interests)」とその達成のために「許容される手続の規則 (regulation of allowable procedures)」とを文化構造に於ける重要要素と考え、両者が結び合つて普及的慣行 (prevailing practices) を形成することを指摘した。<sup>(3)</sup> かくて文化は、かかる側面をよりすとき、目的及び手段に関する一連の規範の体系として現わされるわけである。

文化のこの規範的側面を抽出するとき、「より適切な概念として社会規範 (social norm) なる概念が得られるであろう。K. Davis は人間社会が常に「存すべきところのものを體現している規範的体制 (normative system)」と「存するところのものを體現している事実的秩序 (a factual order)」との「二重の現実 (a double reality)」によつて構成され、社会の現実的な秩序は規範的秩序を俟つてのみ可能であり、故に「個人の社会への依存は究極的に、規範的秩序への依存である」ことを明かにした。<sup>(4)</sup> 社会がその存続維持を意図する限り個人の衝動や行動は所与の方向に規律され、統制されるのでなければならぬ。かくて社会規範は社会の基本的必要に不可欠なものとして凡ゆる社会に存しており、更に個人にとつては、かかる規範への関与は人間的存在の、あるいは社会的個人の必須要件を示すものである。「彼の行動がその仲間の行動と調整、統合せしめられ、そして社会が一貫した構造を獲得し、集団生活活動を可能ならしめるのはそれら (norms) を通じてである」<sup>(5)</sup> 社会規範のうちホークウエイ、モース、法及び制度等が主要なものとして

あけられるが、そのいづれにおいて把握されるにせよ、あるいは大きく文化として把握されるにせよ、要するに、規範は、人間の種々なる衝動や行動に意味と目的を与え明確な様式に組織化するものであつて、社会成員に共通な行動様式、態度、感情を分有せしめるものと云える。従つて、それは行動の指針であり規範である。そしてこれをめぐつて人間行動における正常類型と異常類型が分たれるのである。<sup>(6)</sup>

ここに行動規準というとき、W. I. Thomas によつて發展された情況規定 (definition of situation) の概念が想起されねばならない。この情況規定の行動規準に対する意味は、一つには、個人が従うべき行動様式の規定 (行動規準) があらゆる場合に等しく適用されるのではなく、社会生活に於ける種々なる情況に異つて適用される事實に基くものと考えられる。かくて行動規準は起り得る社会的情況の種々相に照応して無数に細分されるであらう。しかし、それは別として、その概念に与えられた本来の意義は、何よりも先づ、個人の現実の行動を規定するものは与えられた客觀的事實ではなくして、個人がそれを如何に解するかという主観的過客であるという認識に基いている。即ち情況はそれが如何な行動が従えられることになるのである。しからば、個人は自らの願望に従つて自由に情況を規定することが出来ないであらうか。しかし個人が常に他との關係に於てこの社会に存する限りかような自由は殆ど存在の余地は無いであらう。何となれば、起り得る社会的情況の殆どが社会によつて規定されており、又それに応ずべき行動様式がすでに割当てられてゐるからである。かくて情況規定は社会又は集団による個人に期待される行動や個人が種々なる情況に於て演じなければならぬ役割の規定を意味し、その規定の主体は個人にではなく社会に存していると云わなければならない。<sup>(7)</sup>そして情況が共通な規定を与えられているこの状態は Bloch が社会的正常性 (social normalcy) と呼ぶところのものであつて、今一つの側面をいへばそれは社会秩序を構成するものなのである。要するに情況には客觀的側面と主體的側面が存すると云えるが、後者は單なる個人を意味するのではなく、相互作用にある諸個人の共通な態度、即ち社会成員と

## 行動規準と逸脱行動

しての個人或いは團體に社会を意味することに留意すべきである。Bloch が社会的正常性の構成要素として情況規定と共にそれに相關連する特質として何が正常であるかについての「集團の賛同又は世論 (consensus or shared opinion) (6)」をあけたのはこの意味に於てであつた。

要するに行動規準にせよ、情況規定にせよ所与の情況に於ける所与の行動様式の社会的規定を意味するが、それは、行動規準や情況規定が社会成員に共通な基本的感情を表わすものであることを示すと共に、同時にかかるものによつて支えられない行動規準は社会的見地から殆ど意味を有しないことを暗示するものである。かく、Davis によれば、法は皮相的なものに過ぎない、「それは基本的感情 (fundamental sentiments) を規定しないでむしろそれらの産物である。」<sup>(10)</sup> 同じく彼によれば「モーレスは規範的体制の最もかたき core を現す」ものとせられるが、それは社会成員がモーレスに非常に好都合な感情を分有しており、事実「彼等の感情が相似している故に同一のモーレスを分有している人々のあいだに無反省的な連帯の意識が存する」とも云えるものである。<sup>(11)</sup> 曾つて Durkheim が、犯罪が「特別な一つのエネルギーと一つの明瞭さを有つた或る種の集合感情 (sentiments collectifs) を害する一つの行為に於て成立する」<sup>(12)</sup>と宣言した根拠があつたのである。

かように情況規定又は何が正常であるかという正常性規定が集團の consensus に結び合わされている事實は、それが社会や文化を異にすることによつて異なるものであり、又、同一社会、同一文化内に於ても、時代や世代を異にしたり、又その内部の無数の sub-cultures によつても、正常性は異つて規定されることを示すものである。故に本論の中心課題たる逸脱行動の問題究明に、行動を正常と異常との二類型に分つ基準としての行動規準又は情況規定が特定の社会又は文化の特殊な構造に於て語られるのでなければ多く論を進め得ないであらう。しかし以上、極めて抽象的な一般的社会概念に於て論じ得る今一つの重要な側面がある。それは社会の存続維持を前提として、正常性規定を時間的継列に於て把握することであつて、先づ結論的に云つて、ある時期に於ける正常性は常にその時期以前の、即ち過去の正常性

によつて大々的に規定される傾向があると云うことである。それは Bloch の云う「Latencies」という概念に連関して理解されるであらう。Latencies とは「現状には不適切であるとしても持続されている過去に於て有効であつた適応」<sup>(13)</sup>なのである。即ち共通な環境的条件に対応する人々の共通な適応手続の反復は行動を習慣化にみちづけると共に、心理学的レベルに於て適切な、正常な状態を予想するある期待を發展させる。もとより新しい情況の出現は新しい行動様式を要求するであらうが、しかしたとへそれが現状に適わなくなつたとしても、一旦設立された行動様式及び正常性の概念は更に存続しようとする。Latencies は、かくて、常に現在の適応手続の不可缺な側面として機能しており、「正常性はこの普及的 Latencies によつて決定される」<sup>(14)</sup>と云えるのである。それは、巨視的には社会の伝統や慣習の形態をとつて consensus に沈澱せしめられ、微視的には個々のパーソナリティにおける態度や行動傾向として個々人の内部に存し、そして社会が著しい変動によつて特質づけられていない限り、かゝるものゝ支配は社会を秩序づけ安定せしめるであらう。「社会秩序とはある共通な諸情況が反復され、又人々が先鞭をつけられた流儀 (anticipated fashion) でそれらに反応する」——換言せば、それら (情況) に同一意味を課するという統計的蓋然性 (statistical probability) に属するものである。<sup>(15)</sup>

このように社会は所々の情況に於て如何なる行動が正常であり適切であるかを規定している。しかしそれが現実の社会生活の次元に於て完全な反復をもつこと、あるいは全くそのまゝに顯示されるという如何なる保証も存してはいない。云うまでもなく、かゝる行動規定を俟つてのみ、更に正確には、かゝる行動規定が存在しそれが個々の成員の態度に支えられ行動に顯はされてのみ、社会は秩序を与えられ社会生活は可能とせしめられることは事實である。しかしこの社会的な行動規定そのものとそれを顯示する諸個人の行動とは、前者が究極的には後者を俟つてのみ意味を有するという不可分な関連性を有しつゝ、同一物を指すのでなくそれゝ異つた次元に属するものとしなければならぬ。かくて以上の考察から次のことが明かにされるであらう。即ち社会的行動規準はその社会の個人や集団がそれに一致 (conform)

#### 行動規準と逸脱行動

# 行動規準と逸脱行動

しているかそれとも逸脱 (deviate) しているか、更にどの程度そうしているかという點に於てのみ始めて現実の社会の問題となり得るのである。<sup>(16)</sup> かくて行動という點からすれば、個人の行動は行動規準又は情況規定の一つの基準として一致行動と逸脱行動という二類型に両分せられるわけであつて、「人は、彼がそこでそれを為すところの社会的に規定された情況の種類に依存して、正当にあるいは不正当に (legitimately or illegitimately) 食ふ、眠り、歩き又その他の殆どあらゆることを為し得る」<sup>(17)</sup>と云へるのである。

- (1) Ralph Linton, "The Study of Man" 1936. P. 271.
- (2) Herbert A. Bloch, "Disorganization, Personal and Social" 1952. P. 89.
- (3) Robert K. Merton, "Social Theory and Social Structure" 1949. PP. 126-27.
- (4) Kingsley Davis, "Human Society" 1949. P. 52.
- (5) *ibid.*, P. 79.
- (6) I. W. Bennett and M. M. Tumin は「normal-abnormal」という一対の概念は、第一次的に、凡ゆる社会は、道理に合った受諾を得る又究極的分析に於いて人間のこの特性を見做す行動の基準 (standards of behavior) を有している事実に関連しての「*ソシヤル*」 ("Social Life, Structure and Function" 1952. P. 363.) Kimbrell Young は「思考、言論及び外的行動に於いて何れが normal であるか」を「思考や行動の受諾を得る文化的基準」と關するものとした ("Personality and Problems of Adjustment" 1952. P. 608.)
- (7) c. f. Ernest W. Burgess and Harvey J. Locke "The Family, From Institution To Companionship" P. 272. Young, *op. cit.*, P. 110. Merton, *op. cit.*, 179.
- (8) Bloch, *op. cit.*, P. 35. 及び早瀬、馬場編「現代アメリカ社会学」昭和十九「マヤス」の項参照。
- (9) Bloch, *op. cit.*, PP. 63-4.
- (9) *ibid.*,
- (10) Davis, *op. cit.*, P. 67.
- (11) *ibid.*, P. 60.
- (12) Emile Durkheim, "Les Règles de Méthode Sociologique" 1955, 田辺訳 P. 162.
- (13) Bloch, *op. cit.*, P. 35.
- (14) *ibid.*,
- (15) Bloch, *op. cit.*, P. 587.
- (16) Bennett & Tumin は「Conformity-Deviance」として一組の概念は Normality-Abnormality が現行の文化価値に關する概念

であるに對し、行動がどの程度まで所与の社会における正常な役割期待に一致しているか、又は、それから逸脱しているかという範圍、即ち、所与の社会において規定せられた正常な又異常な行動を顯す程度又は範圍の測定、記述をなす概念と考えた。(op. cit., P. 365.)

(17) Davis, op. cit., P. 49.

## II

こゝに逸脱行動とは、社会的な行動規定もしくは社会的に期待せられた役割実行 (role performance) に一致しない従つてそれから逸脱している行動を云う。

吾々が非行、犯罪、自殺、精神異常として参照する所謂問題的病理的な行動の諸形態は明かにこのカテゴリーに入る。しかし例えば電車の中で逆立ちすると云つた種類の行動も同じく逸脱行動に数えられる。即ち車内では情況は規定されており、この場合乗客として期待せられた正常な行動から逸脱しているからである。かくて一概に逸脱行動と云うも、社会生活に於て生起する情況及びその規定の多様性に鑑みてその種類はまさに多様としなければならないであらう。かく多様な種類の逸脱行動を類別するにあたつて吾々が為し得、又為されねばならない最も重要な分類は、その逸脱が社会に於て問題的とされているか、そして問題的とされていないか、あるいはその逸脱にどの程度の又は如何なる手續における裁可 (sanction) を社会が与えているかに関するものである。<sup>(2)</sup>「規準の違反には常にその違反の処置あるいは阻止のためのある基準化せられた手續がある」以上、それはさして困難もなく記述され得るであらう。例えば、犯罪行動は法典に於て犯罪と規定されている点に於て他と異なる一つの特種な逸脱行動を云うが、従うべき行動規準とその逸脱に課せられた制裁を具体的に表示している法典によつて容易にそれを測定出来るのである。

T. Selin は逸脱に對する norm-setters と<sup>(3)</sup>の集團のレジスタンスの範圍を「resistance potential」と呼びそれが「違反の重要性の規定 (the definition of the seriousness of the infraction)」によつて異なるものとした。會つて馬泥行動規準と逸脱行動

## 行動規準と逸脱行動

棒を死刑と規定していた社会は、人々が馬を唯一の交通手段とする遠く分散した聚落を形成して生活しており、従つて馬泥棒は人命を危くするものであつたという基本的情况に關連してのみ理解されるのである。<sup>(4)</sup>このように違反の重要性の規定は、一つには社会生活の基底を支える物理的社会的環境条件に基くものと考えられよう。しかしながら、個人の「統計的正常性の基準 (the standards of statistical normalcy) への固執」がパスナリティに却つて有害な影響を与える場合が存し、従つて多数者の行動が必ずしも (精神衛生の見地から) 願わしいパスナリティ規準 (desirable personality norms) を設立しないというパスナリティにおける問題と同じく、<sup>(5)</sup>それは社会の存続維持に關するかような有用性によつてのみ必ずしも決定されるものではない。故にそれは、何よりも先づ第一次的に、侵害されたそれぞれの規準に社会が付与している重要性の始何に、consensus 又は集團成員の共通な感情や態度に基いていと云うべきである。それが社会にとつて有用であり健全であるか否かは又別の問題としなければならぬ。

次に起る問題は、一致と云い逸脱と云うことがある特定の規準に關してのみ云い得、従つて規準を異にすることによつて同一の行動が一致とも云え逸脱とも云えないかどうかということである。もしそれが可能ならば、ある個人の犯罪行動は法によつて表示されている規準からは逸脱しているが、もし彼がかような犯罪的行動様式を正常なものとして採用している特殊な集團に所屬するならば、かかる集團の規準に充分一致していると云えるわけであつて、それ故犯罪行動は逸脱行動でないと云うことも理論的には可能となる。この場合逸脱行動としては改心、密告、裏切り等が考えられるわけであるが、同時に他面かかる行動そのものは法を支持する社会には一致するものである。もし逸脱行動がかように各々特定の規準に關してのみ云われるものとすれば、明白な正常行動ですら特殊な集團の有する特殊な規準に關しては逸脱としなければならぬことが起り得るわけであつて、これでは逸脱行動の人間行動一般における特性を明かにし得ないであらう。故に、人間行動を一致と逸脱、正常と異常に分つ行動規準は、前章で明かにせられたように、モーレスや制度などの名の下に把握されるコミュニテに於ける支配的多数者の共通な感情や態度に究極的な基礎を有



している種類のものでなければならぬのである。

行動規準は、前述したように、全情況に等しく適用されるものでなく種々なる情況に應じて異つて適用されるのと同じく、社会の全成員に等しく適用されるものではない。それは人々が社会秩序に於て保持する様々な地位に關して多様としなければならぬ。R. Linton によれば、凡ゆる社会は、性、年令、階級等を参照点とする社会的に規定された地位 (ascribed status) を發展させるのであつて、それは社会体制の大半を組み上げると共に個人の日常生活活動に於ける殆どを処理せしめるものであつた。<sup>(6)</sup> 地位には規範的エレメントが含まれている。即ち「地位はそれを占めるものに対して最少限度の義務行動を規定する」<sup>(7)</sup> 所与の地位において個人が現実如何に履行するか、即ち人が現実彼の地位の要求を遂行する様式は役割 (role) と呼ばれている。人はその占める地位に結びついた最少限度の要求を遂行しようとして試みるであらう、でなければその地位を失わねばならない。<sup>(8)</sup> 成人には成人に規定された地位がありそれに伴う特定の役割行動がある。子供は成年期に達するに及んで子供らしさを取去ることを要求され、彼が少年地位に期待されるが如き振舞をなせば、この場合、社会的に規定された地位から逸脱しておりそれを常に続行すれば彼は与えられた正常な成人地位そのものを失わねばならないであらう。女性に適切なものは男性には必ずしも適切ではない。<sup>(9)</sup> 階層や職業に關する地位についてもそれは同様である。例えば牧師はその教区を掌り自らの牧師としてその地位に附随する種々なる役割行動を期待される、彼が日曜日に行う説教は牧師として期待される種類のものに限定されており、故に、もし彼が宗教や教区の事柄についての判断から全く離れて問題をとりあげたり、意見を述べたりするならば、そのような見解は受諾され得ないのみならずコミュニティに於ける彼の地位そのものが強く脅かされるに至るであらう。一方、ある種の職業的地位に在るものが、その地位からたとえ逸脱を示すものでありながら、同様の行動を敢行するとしても何ら問題とされるに至らないのである。<sup>(10)</sup> 即ちある種の職業的、階層的地位にはそれぞれの職業や階層的屬性によつて規定される行動の限界や範圍が結びついており、同一の行動がいづれの地位に關しても共に逸脱を示すものでありながら、一に於

# 行動規準と逸脱行動

いては許容され、他に於ては許容されないものである。Bloch はこの「(ある) 行動の行われなければならない範囲及び許された限界 (the range and permissive limitations)」もしくは「個人が、その行動に於て、自己の決つた地位の限られた限界から離れ得る経度 (latitude)」は、その地位に関連して發展された期待から生ずるものとした。<sup>(11)</sup> ある種の人々にとつては当然な正常な行動と認められるが、ある種の人々にとつては異常な非難さるべき行動と人をして思わしめるのはそれぞれの地位についてわれわれが有しているそうした期待の相違に基くものである。

以上、地位に関する考察は、逸脱行動の究明が単に社会と個人の抽象的な関連的把握にあるのではなく、社会成員各々の個人差にも関連せしめながら考察されねばならないことを暗示している。吾々が後に、それをパスナリテイの形成發展過程のうちにあとづげんとする理由は先づここに存している。

- (1) Bennett & Tumin, op. cit., P. 306.
- (2) Davis, op. cit., P. 59.
- (3) Young, op. cit., P. 608.
- (4) Bloch, op. cit., P. 70.
- (5) Bloch, op. cit., P. 530.
- (6) Linton, op. cit., P. 114.
- (7) Davis, op. cit., P. 89.
- (8) *ibid.*, P. 90.
- (9) しかし同じ女性についても、例えば、子供を生むこと即ち母親という地位は妊娠年令にあるすべての女性に許容されているのではない。unmarried mother に対する社会の非難や酷評は、彼女が社会的に規定された婚姻関係にある女性のみと与えられている地位を先取するところにある。しかも、それが非公式であろうと、性行為そのものは今日の性道徳はそう強く断罪しないのである。そして又このことが unmarried mother を生ぜしめる一つの社会的要因をなしている。(Bloch, op. cit., P. 390-91)

(10) Bloch, op. cit., PP. 323-24.

(11) *ibid.*

個人の生活は適応 (adjustment) 即ち「自己の needs に会し、その外的及び内的環境に適合 (adapt) する努力」に於て成立する。しからば、逸脱行動はそれを顕示する個人にとつて如何なる影響、効果を有するものであらうか、更に何故個人は多くの人々が一致するにかかわらず逸脱しなければならぬのであらうか。この問題は一致・逸脱の概念を適応・不適応 (maladjustment) という新しい一組の概念の下に考察し、両者の関連的把握に於て明かにされるであらう。適応・不適応の概念によつて吾々が考察せんとするところのものは、個人が「闘争を最少限度に止めつつ、自己の社会的諸關係を通じてスムーズに動くか、それとも困難やテンションを経験するか、自己自身と平和な状態にあり自己の社会的役割に満足しているか、あるいは不幸で欲求不満があるのか」等、要するに「所与の個人が社会環境に於てどのようにやつて行くか」という問題である。時には同義的に用いられるこの二組の概念の相違は以上に見られる如く、一致・逸脱が謂わば行動に於ける外面的側面を指すのに対して、適応・不適応が主としてその内面的、心理的側面を指すものと考えることが出来る。このことは、先づ逸脱行動がそれを表す個人の側に於て何ら不適応の問題を生じない事実に明かにされよう。Bloch は「常習犯罪者、乞食、移民 (habitual criminals, beggars, migrants) 等の如き諸個人はある樹立された行動規準から恐ろしく離脱しながら、しかも personality disorder の著しい兆候を示している」場合の存することを指摘し、又 Merton は「逸脱行動のある形態は一致行動 (conformist behavior) と同様心理学的に正常であることが見出され、かくて逸脱と異常性との等式 (the equation of deviation and abnormality) は問題とされるであらう」と指示する。多分、逸脱行動、例えば犯罪行動は、通常、それを顕示する個人の側に於て、人間關係に於ける種々なる支障や心理的緊張によつて表される何らかの意味での不適応を伴うことが考えられるであらう。しかしかかる場合は、逸脱者が一方において同時に法を支持する一般市民でもあること、即ち自己の行動に全く反対的な規

#### 行動規準と逸脱行動

## 行動規準と逸脱行動

準を有していることを前提としている。故にそれは犯罪的行動規準を正常なものとして合理化し採用している個人に於ては問題は異つてくる。又それが往々集団を形成するとき、彼の行動に集団的支持が与えられるのみでなく又吾々が平常的社會に於て満しているような人としての彼の種々なる要求もかかる特殊な集團のうちで満されるのを知るのである。

Bloch が指摘するように、「犯罪人は倫理や忠誠を欠いていないし、本能的に反社会的(anti-social)たるのではなく、市民一般のために存している social patterning は同じように犯罪人のためにも存している」<sup>(9)</sup>のであつて、彼は習俗的又平常的社會に於けるアソシエーションの代償となるものを地下社會に於て充分見出し得るのである。この事は少年非行が常に集團に關する問題であり、家庭に於て満されない兒童の基本的欲求が非行集團に参加することによつて満されようとする傾向が少年非行化に主要な役割を演ずる事實に照しても明かである。反社会的行動傾向を有する個人は普通の社會においては当然種々なる不適応を蒙るであらうが、かかるものを正常なものとして採用している集團に於ては、彼は彼に適う仲間を見出し、そこに自身のパースナリティに符合する地位や役割を獲得することによつて、適応を樹立することが出来るのである。

このように、逸脱行動が必ずしも不適応を生じない事實は、反対に、一致行動が必ずしも適応を樹立しないことを暗示している。自己の行動傾向に鋭く対立するが如き行動規準の採用や強制はその個人の側に於て不適応と呼ばれる烈しい肉体的精神的緊張を要しなければならぬであらう。この場合、個人の行動規準への一致のための継続的な努力がその規準の充分な内面化(internalization)——それは自身のパースナリティの何らかの變革を意味するであらう——を成就せしめたとき、適応は樹立されたのである。しかしこれに失敗した場合、個人は一致すべき規準と自己との間にひらがる間隙にためまざる精神的緊張や斗争を来さざるを得ないであらう。この場合個人は、遂には neurosis や psychosis 或いは自殺の如き自己の精神的肉体的破壊を蒙るか、それともかかる結末を回避するために一致すべき規準そのものから逸脱する以外に途はないのである。規準への一致が所与の役割行動において外觀的に明示されるものである限り、

かかる行動の確實な施行は、その個人に如何なる不適応問題も含まれざるが如く思わしめるであらう。突如として彼は自殺する、そして吾々は驚くのである。このことは適応・不適応の問題は親密な集団のうちでさへ判別し難いような、それぞれ個人の内面的な問題であることを示すと同時に、規準への一致そのものが却つて不適応を惹起することを明かにしていると云える。要するに、規準への一致であらうと逸脱であらうとそれぞれ適応及び不適応のそのいづれでもあり得る。しかしそれは、この二組の概念が何等無関連であることを示すものでない。むしろそれは以上においても示されているように本論に於て最も重要な概念としてとり上げられている行動規準と全く密接に関連されていることに注意すべきである。次に今しばらく立入つてこの問題を検討してみよう。

さて、人間行動という見地からすれば行動は常に何らかの感情的状態を含んでおり、感情に於ける安定状態は人間の基本的欲求と考えられる。ここに反社会的行動がそれを採用する個人の側に於て不適応を生じない理由はかかる行動様式を支持する特殊な規準が存在しそれに個人がよく一致（充分な内面化）しているからであるが、更に正確にはそのことが個人の感情的安定状態を保証するが故にのみである。一致も逸脱もこの感情的安定に関して各々適応・不適応いづれかを導くわけであるが、同一の行動規準はそれを採用する個人のパーソナリティに於ける相違によつて、ある個人は適応を樹立し、ある個人は不適応を来すことも考えられる。もし社会秩序を支える基本的な行動規準が人間の感情的安定状態と全く無関連に存在しており規準への一致が多くの個人の側に於て不適応を来すものとすれば、社会は如何にして存続し得、個人の生活は如何にして可能であらうか。社会のスムーズな運行が保証されるためには行動規準及び個人の感情的安定の双方が共に保証されるのでなければ、即ち規準への一致は感情的適応の要件を含むものでなければならぬ。しかし幸なことに、Bloch が指摘するように、集団の有する情況規定は「ある情況に適切と認められる行動や態度の形態を特殊化するのみでなく行動に伴うはずである感情の種類をも特殊化する」のであつて、個人の行動の感情的表現はその個人が成員として存している集団の基準に照応して形作られる傾向にあり、喜び、怒り、恨み、憎しみ、平

## 行動規準と逸脱行動

静、冷淡、愛、怖れ等の表現は所与の文化の特殊な斜面 (slant) に応じて道づけられる仕組になつてゐるのである。<sup>(10)</sup>

即ち、社会は如何なる行動が従わるべきかを規定してゐると共にかかる行動に従事することが同時に個人に感情的安定を付与するように個人を形成してゐるのである。Burgess & Locke は「集團の承認 (group approval) を刻印されてゐる期待は相容れない課せられたものとして集團成員に突き当るのでなく、それは社会的に願わしい個人的基準 (socially desirable personal standards) としてゐる」と云ふ、又 Davis は「社会に育つた個人にとつては各規範は必ずしも彼が従ふ又は回避しようとする如き外的規則 (external rule) ではなくそれは彼自身の一部であり得、それは全く客觀的に考えられたり又は規則として理解されたり感ぜられたりするのでなく単に彼自身の一部として自動的に行動に表現され得る<sup>(12)</sup>」とした。感情的安定への人間の基本的要求に根本的に抵触するが如き行動規準は存続し得ないはずであるし又、この故に社会はその秩序の基底をなす行動規準がかような要求を大体に於て満足せしめる故に存続し得ると云えるのである。従つて規準への一致は適応であり、不適応は規準からの逸脱を意味するものであると断定しても、多くの場合、殆ど差つかえないわけである。

しかしこのことは社会的期待が常に個人的欲求に一致するという謂ではない。両者は密接に関連せられながら、一方に於て、むしろ対立せしめられるような關係をも有してゐると云える。以上に述べられた行動や感情の文化的様式づけは、生物学的存在として生れおちる個人に対する訓練のことがらであり、故に何等かの抱束や制限を意味するものである。文化が根本的には禁止と命令に他ならないとせられる所以である。この事實は文化と個人的欲求との間に本来何等かの齟齬が存しており前者が後者に抵触する場合のあることを明示するものであつて、それこそ、永い間社会学者達を悩まして来た「社会と個人の斗争」の深淵だつたのである。又、この故に永い間精神分析学者などが「社会統制によつて抑止され破壊された衝動」<sup>(13)</sup>を個人の逸脱行動や不適応現象の殆ど唯一の原因と考えた事實は、今日に至つて全面的支持が与えられていないとしても、理由なきことではなかつたのである。文化が必ずしも個人的欲求に抵触するもので

ないとしても、「文化が執拗にある根本的要求に抵触する場合、相当量の個人に *neurosis* が起る」事実は今日も多くの優れた精神分析学者等 (Rich, Fromm, Horney, Fenichel) の一致した見解である<sup>(14)</sup>ことを想起すべきである。

- (1) Young, op. cit., P. 679.
- (2) Bennett & Tumin, op cit., P. 367.
- (3) *ibid.*, P. 372.
- (4) Bloch, op. cit., P. 533.
- (5) Merton, op. cit., P. 126.
- (6) Bloch, op. cit., P. 274.
- (7) Bennett & Tumin, op. cit., P. 369.
- (8) それ故、「…彼が採用しない集団の規準によつて犯人を取扱うことは、予防や更生に関する限り有用でない。」彼が自己の犯罪の行動様式又は態度を改める真面目な努力は、「ただ個人が punishing group の規準を内面化するときのみ」可能なのである。(Young, op. cit., P. 626.)
- (9) Bloch, op. cit., P. 529.
- (10) *ibid.*,
- (11) Burgess & Locke, op cit., P. 277.
- (12) Davis, op. cit., P. 55.
- (13) Merton, op. cit., P. 125.
- (14) Abram Kardiner and Ralph Linton, "The Individual and His Society" 1939. P. 414.

#### IV

逸脱行動や不応を個人に押進める圧力というものが、もし所与の社会又は文化に存しているものとすれば、何故、ある個人が規準に一致し適応を樹立するにかかわらず、ある個人が逸脱し、又不適応を来するのであるうか。その回答は先づ、かかる圧力が、社会全成員に等しく与えられているのではなく、社会構造(特に階級的な)に於ける個人のそれぞれ特殊な位置に関して異つた程度ではたらいっているということに求められるであろう。後に示す Merton が注目したの

## 行動規準と逸脱行動

はかような点であつた。<sup>(1)</sup>しかしこれのみでは充分ではない。即ち、同一の社会階級に属し同じような状態にある個人にせよ、一は逸脱し他はしないことが充分にあり得るのである。それは以下考察される個人差のしからしめるところであると考えることが出来るよう。

社会は成員に於ける共通性と共に同時に異質性、個人性において特質づけられているとも云える。「諸個人は慣習や共通な行動様式に一致する範囲 (extent) を異にしており、更に、同一の共通な行動様式を分有している場合でも、同一の採用の強度や程度をもつてそれに反応するものではない。」<sup>(2)</sup>ここに逸脱行動が社会的に採用された行動規準からの逸脱を意味するものとすれば、社会成員のこの個人的多様性又は個性化の事実はそれと如何なる関連に立つのであろうか。Durkheim は「社会の道德意識は一切の個人内に全部見出されるが……非常に普遍的であると同時に非常に完全な一致は根本的に不可能である」という認識に立ちつつ、「諸個人が集合的類型 (la type collectif) から多少とも違背していないような社会は存在し得ず、故にこれらの違背のうちに犯罪的特徴を示すもののあることも避けられない」<sup>(3)</sup>ことを指摘しているが、集合的類型からの違背とは究極的には「意識の多様化」即ち「個性化」に他ならないのである。<sup>(3)</sup>しかし吾々は個性化が逸脱行動の深淵を準備するものと直に論結しないでおこう。むしろここでは吾々の立場から、社会化 (socialization)、個性化 (individualization) の過程はパースナリティの形成發展過程に於て不可分に関連されており、個人の逸脱行動や不適応に関するすべての問題は究極的にかかる過程に関連されてのみ明かにせられるというのが更に適切であろう。Bloch のまさに適切な言葉を借りて云えば、「現代社会学の全分野において最も挑発的な議論の一つは複雑な社会的文化的諸過程及び諸様式が、如何にして一方において劃一行動 (uniform behavior) の制限を課しつつ個々のパースナリティに独自の相違を齎すかという問題であり、この問題を究明してこそ、正常な又異常な行動に関する吾々の洞察の源が見出される」<sup>(4)</sup>と云うべきである。以下、Bloch の所論に基いて考察することにしてしよう。<sup>(5)</sup>



諸個人に共同生活を可能ならしめるものは共通な文化の分有、あるいは、かかるものによつて形成されたパースナリティに於ける共通性に基いている。パースナリティ形成発展過程から捉えれば、児童は先づ特定の文化価値が既に樹立せられている社会に生れ、かかる文化価値の習得を通じて一成員として社会への参与を明かにする。

しかし「人は諸情況に直面するのであつて文化それ自体の広汎な抽象 (the broad abstraction of culture itself) に直面するのではない。」(P. 587) 文化媒体に関して家族に付与せしめられた機能の重要な意義にも明かにせられるように、文化価値の習得は常に「human situation」(P. 588)を通じてなされる。故に「個人がその生涯形成に於て他人と有して来た the direct behavioral relations」(P. 88) は K. Young が「personal-social factors」(ibid.) として参照するものであつて、パースナリティ形成過程に於ける最も重要な要因と考えられる。即ち、それは社会化と共に同時に個性化を含むからである。例えば、「児童の受理するところとなる宗教的儀礼に関する概念は、両親が教会に対して有する態度と児童の生活にこの価値をかかわらしめんとする運載者 (両親) のとる方法に依存する」(P. 90) と云つた具合に、所与の文化価値の児童への刻印は、文化価値の運載者のパースナリティ特性とこの同じ運載者によつて懷柔された文化価値への態度という二要因に依存するであらう。かくて個人のかかわらしめられる数ある文化は諸々の運載者のパースナリティ特性と情況の性格によつて屈折せられ、何らかの意味で歪められた形で児童にやつてくる (ibid.)。しかしこのことは人間に共同生活を可能ならしめる共通な文化の所有ということと何ら妨げるものではない。一文化の個別化、多様化は現実社会の次元に於ては全く不可避な側面であり、それ故、全く正常なものだからである。故に文化習得過程にあとづけられる個人の社会化は、同時に一方では、個人がそれぞれ何らかの意味で他と異つたものになる過程即ち個性化を含んでいる。

この個性化という点から考察すれば、先づ第一に、個人はそれぞれ独自の遺伝的素質をもつて生れるということから始められるであ  
行 規 準 と 逸 脱 行 動

## 行動規準と逸脱行動

らう。これは生きるための環境に対する不可欠な素材であるが、かかる生物学的条件における個人的差異は物理的及び社会的環境への反応の方法・手続をも個人毎に変化せしめる (PP. 91-4) として又、彼が必ず養育されねばならないという事実は、両親等その養育者が以上の幼児の反応、適応方法・手続に最も決定的な影響を与えざるを得ないことを暗示している。即ち児童をめぐる社会界における接触は先づ両親でありその後少数の associates に限定されている。これらの人々は児童を処理し、食物を与え、喜ばす、特質的なテクニクを發展させているが、それはかかる人々各々の個人的な態度や習慣様式を反映するものであつて、児童の反応行動に於ける質的差異 (生物学的) と相俟つて、この養育方法というものが各児童にそれぞれ独自の習慣テクニクあるいは、反応様式を固定し發展させる。かかる基本的な反応様式は、児童の發展し行くパースナリティの core として存続するに至るのであつて、即ちそれはその個人のパースナリティに対する「core of consistency」となるのである。(PP. 98-9) かくように形成せられた反応様式に基いて児童は行動するのであるが、彼は間もなく他人が自分の行動を良いとか悪いとか見做すのを知る。児童が自分の行動の意味について真の概念をもつのは、彼に対する他人の行動や態度がどんなものであるかを暗示されるに至つてのみ始めて可能である。ここに他が彼の行動にリアクトする特質的反応は他が自分を如何に考えており同時に自身を自らどう考えるかについてのある概念、即ち「genetic status」と呼ばれるところのものを児童に付与するに至る。そしてこれがその個人の社会的目標を決定するにあつてその範囲を局限し、結局彼の達成 (attainments) の範囲をも局限することになるのである。(PP. 105-6)

以上の事実は諸個人がそれぞれ独自の価値観念、態度、反応様式を有すること、換言すれば独自のパースナリティを有するということのみにとどまらない。肝要なことは諸個人はかような独自性に規制されながら、その生活の過程に於て種々なる集団や数多くの異つた情況に立ち向わねばならないということである。個人のその本来的な行動傾向に鋭く対立するが如き規準を有する集団への参与、あるいはかかる行動傾向を現実の行動に於て表示せしめる余地の全く与えられていない新情況に個人が直面するとき、即ち、自己のパースナリティに既に沈澱せしめられた自己の地位や役割の概念と全く相違する地位や役割の要請は、個人に不適応の状態を招来せしめるか、それとも、自己の感情的安定を

守るために従うべき規準からの逸脱を敢行せしめるであらう。そしてこの情況は又、所謂、自殺型 (suicidal personality type) にとつては明かに一つの危機を形成する。この型を特質づけるパースナリティ構造の不柔軟性 (rigidity) は極めて限定づけられた生活の意味や行為変更 (alternatives) の局限に表され、彼自身の固定した目標に關して満足を与え得ない情況に於ては、彼は最早、生活に一切の意味はなく、従つて社会的情況から自身をとり除く以外に道はないのである。(9)

しかしこのことは児童期、特に初期児童期に固定された基本的な行動傾向が一切の行為変更を排してその生涯を全く決定すると断定するものではない。彼のパースナリティの core が過去の諸情況に於いて形成されたのと同じく、新しい情況は新しい経験をその内部に注入することによつて彼のパースナリティを変つたものにするであらう。これが正常なパースナリティの發展過程であり、それに伴うある程度の不適応や逸脱行動も共に正常なものである。人間は自身に全く反動的な生活目標や地位を設定し、それがたとえ、烈しい不適応状態を経験するとしても、厳しい訓練によつて、neurosis や psychosis によつて現されるような継続的不適応に陥入ることなく、自身に鋭くはむかつてゐる諸規準に成功的に一致することさへ可能なのである。(7)

しかしながら、過去の行動様式が不用となり新たな行動様式が要求される新情況の出現は、いづれにしても、パースナリティに於ける一つの「クライシス」を形成することは事實である。かくて「彼は現在のクライシスに、彼が過去の相互作用から發展させて来たパースナリティの種類によつて、うまく或いはまずく対処 (meet) する」(8)であらう。要するに、個人は他と區別すべき相対的な一貫性を有しており、それは過去或いは相似た過去の諸情況によつて樹立して来た連鎖に依存しており、故に個人の逸脱行動や不適応の問題は個人の児童期からの蓄積的な經驗過程をあとづけることによつてのみ明確な回答が得られると云うべきである。(9)

「吾々のすべては行動、感情、及びその他のユニークな布置 (configurations) をもつ。しかし吾々は又これらの布置の多くの部分を他と分有している。吾々は分有するが故に吾々は文化的に行動出来るのである、吾々は異つてゐる故に吾々は斗争し、又文

#### 行動規準と逸脱行動

# 行動規準と逸脱行動

化における變動を生ぜしめるのである。人は集団に対しているのではなく、それと相互作用にある、時には彼の相互作用は分有されたユニカームな型のものであり、時にはそれは斗争的形態のものである。<sup>(10)</sup>」

- (1) Merton, op. cit., Chap. 4.
- (2) Bloch, op. cit., P. 60.
- (3) Durkheim, op. cit., PP. 136-67.
- (4) Bloch, op. cit., P. 432.
- (5) Bloch, op. cit., Chap. Five.
- (6) Bloch, op. cit., PP. 574-77.
- (7) Bloch, op. cit., P. 534.
- (8) Davis, op. cit., P. 273.
- (9) Bloch, op. cit., P. 534. Davis, op. cit., P. 261. Kardiner, op. cit., P. 416.
- (10) Bennett & Tumin, op. cit., P. 287.

## A

以上によつて明かにされたところは、社会の現行秩序は行動規準とその成員の行動によつて示されるそれへの一致によつて構成されているが、しかし、たとえ如何なる社会であらうと或る成員の逸脱行動や不適応を全く経験しないような社会は存し得ず、故に社会は一致行動と同時に逸脱行動に於ても特質づけられており、何れもが社会の本質的特性との連関に於て存在しているということであつた。

しかし、それを顯示する程度や更にその形態や特質に関しては社会や文化を異にすることによつて大きな相違が認められる。例えば、教会という支配的制度が他の凡ゆる制度をかかる支配的機関から流れる価値に従属せしめていた中世社会や伝統的慣習が生活の殆どの分野に浸透していた原始・未開の社会等に於ては、今日程生活に於ける適合過程に困

難をもたなかつたし従つて逸脱行動や不適応を示す個人の数も限られていた。それは或る根本的、支配的な規準や価値に基いて生活の主要な殆どの分野が調和整合され、個人の生活目標や価値体系に首尾一貫性が与えられ、行動や感情がかかる一貫性に基いて方向づけられていたからである。<sup>(1)</sup>しかし一方、この現代文明社会以上に、かくも多くの数量と種類の問題の行動を頻発せしめている社会はないのである。結論的に云つて、それは無数の新情況の出現と社会秩序の本質的機能としてはたらいでいた支配的規準の衰退に伴い数多くの異つた規準が出現すると共に、それが相互に相争うことによつて、人間に會つてない新たな適合の問題を課したからである。

現代社会に於ける最も特質的な個人の適合問題の一つは、規準の多様性・異質性が個人をしてその中如何なる規準に一致すべきかという混乱に陥入れ、全く反動的な二つ又はそれ以上の規準に一個人が同時に一致を要求される情況を生ぜしめたことである。かかる情況においては、S. A. Stouffer の指摘する如く、個人は或る一組の役割期待に一致し他の組への不一致（逸脱）を来すか、或いは適用される裁可が最少限度であると期待される妥協的立場（a compromise position）を求め、二つ或いはそれ以上の組の役割期待に全面的ではないが部分的に一致しようとするか何れかを選ばねばならない。<sup>(2)</sup>ここに逸脱行動は不可避的であり、又後者が個人の側に於て精神的斗争や緊張の状態を生じなければならないことは容易に推測される。そしてこれが、例えば、Bloch が、自殺は二つ又それ以上の従わなければならないが相互に排他的である関心を履行しようとする個人のあいだに起り、これを精神的斗争によつて押進められる自殺の型として分類しているように、<sup>(3)</sup>又、Davis が、mental disorder の量や種類が社会環境を異にすることによつて異なる事を、「社会がその成員に両立的でない諸役割を課すこと、又、首尾一貫的でない諸規準に従うことを強制する程度を異にする」事実によつて理解しようとしているように、<sup>(4)</sup>neurosis や psychosis 更に自殺の如き又その他の問題の行動に導く母体を構成するものと考えられるのである。

この斗争的な諸規準の出現は性や年令に關する地位に於ける混乱にも表される。「女性は本来、家庭にあるべ

#### 行動規準と逸脱行動

## 行動規準と逸脱行動

きである」という會つての支配的規準は「女性は男性と等しく種々なる職場へ進出することによつて社会における地位と独立を確保しなければならない」という有力な現実の規準と同時に存在し相争わねばならない。「親は子をコントロールすべきであり子は親に従うべきである」という規準は、個人の選択の自由や競争によつて特質づけられている現代社会が、かかる成人地位への準備として許容している青年地位に与えた自由の範囲と抵触しないではないであろう。<sup>(5)</sup>

しかも相異なる規準の斗争は、単にパスナリテイ・テンションを個人に課するのみでなく、それは個人相互を斗争に引き入れるであろう。そしてこの場合、最も重要なものは、家族集団に於けるその問題である。即ち、夫婦斗争 (marital conflict)、親子斗争 (parent-youth conflict) として、両性や世代間の斗争が、最も緻密な人間関係の故に最も鋭い焦点をそこに見出すからである。<sup>(6)</sup> 又、この斗争は集団、階級、制度等のそれぞれの間に更に大きなスケールの下に展開せられ、ここに Bloch が凡ゆる社会問題の発生母体として参照する「social discord or disorder」の状態が招来せられるのである。<sup>(7)</sup>

現代社会を特質づけるかような斗争的諸規準の出現の理由は、社会的分化の發展に基く社会構造の複雑性と急速な變動速度が個人が會つて経験しなかつた無数の新情況をつくり出し、しかもそれが如何なる文化的規定も有していなかつた故に、かかる情況にあてられる規定をも無数に多様なならしめた事実に求められるであろう。その一つの側面は近代社会を特質づける無数の集団の分立である。ここに、個人の各種集団への関与は高度に分化した近代社会に不可避的な現象とせられるが、彼の関与する集団の各々が彼の直面する諸情況にすべて共通な規定をえ与るとは限らないのである。

即ち各集団はそれぞれと異つた行動規準を有し得ると云える。かくて個人は、如何なる集団にも、その家族にさへも、自身を決して充分に同一視 (identify) 出来なう「marginal area of group association」におちい<sup>(8)</sup>つた。しかも、所与の情況に於ける個人の反応が先に指摘されたように「human situation」に依存する事實は、その情況がたとえ一つの明確な規定を与えられているとしても、それへの反応を非常に多様な又捕捉し難いものとならしむるのである。そして

この反応に於けるヴェリエーションは、Bloch によれば、「a penumbra or marginal area of response」を設立し、問題的或いは反社会的行動を惹起せしめる基体即ち個人的社会的ディスオーダーの基礎を横えるものなのであつた。<sup>(6)</sup>

そしてこのことは文化という観点から分析すれば次の如くなる。即ち R. Linton は、あらゆる社会の文化の core を設立する Universals (成員に共通な観念、慣習) 及び Specialties (或る社会的に承認された個人のカテゴリーの成員によつて分有されている文化エレメント) と更にこの core をめぐる不確定な流動的地帯を形成する Alternatives (個人的選択の自由に委ねられ不統合な文化の部分) との三つによつて成り立つことを指摘しつつ、その急速な社会変動の故に近代社会の文化が相競う Alternatives の著しい増大によつて特質づけられることから、次のように問題を提示している。<sup>(10)</sup>「文化内に於けるかかる流動的解体的条件は、それを運載する社会に不可避的な再現をもつ。社会諸成員が一社会として機能するを得せしめるのは、彼等の文化の core を形成するエレメントへの社会成員の共通な回帰にある……。社会成員すべてが関与する文化のエレメントが非常に少くなるとき、即ち文化的 core の割合がすぐれて減するとき、集団は協同 (cooperation) を望まず、集合 (aggregate) の状態に復帰する」<sup>(11)</sup>と。

次に現代社会に於ける逸脱行動や不適応現象の問題究明に有効な今一つの分析方法は「achieved status」を焦点に置くものである。

「achieved status」は個人の特殊な資格や能力を要するものであつて、「ascribed status」に於ける如く等しく個人に割当てられているのでなく、「競争や個人的努力を通じて占められるよう個人に開かれている」<sup>(12)</sup>ものである。近代社会はこの種の地位への多くの門戸を開いたと云える。すべてはこの地位をめぐつて他と競い争うことが出来、又、争わねばならない、それは現代社会の個人に対する要請である。しかし能力があり努力するものが必ず克つのではない。何れにしても到達し得るものは限られており、敗北者が多いのである。<sup>(13)</sup>Merton が「文化的に規定された目的」とその

#### 行動規準と逸脱行動

## 行動規準と逸脱行動

達成の為に許容された「手続の規則」との相互關連的理解のうちに逸脱行動の源泉を見究めようとしたのはかゝる競争的秩序に於ける個人の適合過程に於てであつた。即ち「ある目的におかれた文化的強調は制度化された手続きにおける強調の程度に独立して異つてゐる」<sup>(14)</sup>もしこの社会構造に於ける二側面に有効な均衡が維持されるならば、これら二つの規範又は規準への一致によつて個人に満足が与えられ、従つて逸脱行動は続出しないであらう。しかしながら、現代社会を特質づけるものはまさしくこの均衡の破壊なのである。かくて彼によれば「常軌逸脱行動 (aberrant behavior) は、社会学的には、文化的に規定された切望 (aspiration) とこれらの切望を実現する為に社会的に構造づけられた avenues との間の解体の兆候と見做し得る」ものであつた。<sup>(15)</sup>

「文化価値の体制が真に何よりも先づ、すべての人々にある共通な成功目標 (success goals) を讃美する一方、同一の人々の相部分に對して、これらの goals に達する承認された様式に近づくことを社会構造が厳しく制限し或いは完全に閉ざしてゐる」場合、逸脱行動は大量的に頻發せざるを得ないであらう。かくてある個人は制度的に禁止されているが、少くとも成功の幻影を獲得するにしばしば有効な手段に訴えんとし (Innovation)、或るものはその手段が自己に有効でないとしても、その規範的エレメントの内面化の故に拋棄するあたわず、却つて成功目標そのものの拋棄又はキリツメに導かれる (Ritualism)。文化的に規定された目的、手段双方を固執しながら、その手段が自己に何等生産的でない場合、個人はその双方を拋棄する事によつて、社会生活から撤退し、それに付帶する一切の斗争を終らせるであらう (Retreatism)。或いは個人は、価値と努力と報賞 (merit-effort-reward) との間に有効な均衡を樹立するため、この不均衡を招來せしめてゐる社会構造そのものの変革を敢えて意圖するに至るであらう (Rebellion)。これら逸脱行動は、Merton によれば、すべて以上の不均衡の故に、即ちかかる現代的情况へのある意味で当然な、正常な反応・適合の様式として現われるのである。<sup>(17)</sup>

最後に、この小論を結ぶにあつて、論じなければならぬ一つの重要な問題が残つてゐる。それは社会や文化の發展が新たな規準の創造にあるということ、故にその条件は現存する諸規準への固執にあるのではなくむしろ逸脱にある



ということである。しかしそれは単なる逸脱を意味しない。いうなればそれは、前述した Merton のさう「Rebellion」がまさにそれであるように、新たな規準の樹立のための逸脱である。これに關して、Bloch は「creative deviant」という概念の下に、ある個人又はある集団の行動様式がたとえ世の規準から全く逸脱し故に現行の社会秩序に厳しく反逆するものであらうと、やがてはその追従者を見出し遂には社会的に採用せられた新たな規準となることを指摘しているし、又<sup>(18)</sup> Linton も他の諸成員の如何なるものにも分有されない、それ故に、文化と称されない「Individual Peculiarities」が遂には文化の core に合体される「凡ゆるものの出発点」たることを看過しなかつた。<sup>(19)</sup> 會つて少数の偉人や英雄に限られていた「creative deviant」は現代社会に於て更に多くの人々に拡大されたと言えないであらうか。何となれば、現代の社会的文化的構造そのものはかかる個人的自発性又は創意のこよなき發生地盤を準備したと云えるからである。しかもそれは、吾々がずつと考察して來た自殺や犯罪等の問題的な逸脱行動や不適応現象と全く同じ發生地盤に連なるものなのである。「道德意識の進化に必要なことは、個人的創意が貫徹されうることである。ところが、世紀に先行することを夢みる理想家の道德意識が顯現されうるためには、時代の水準下にある犯罪人の道德意識が存在しなければならぬ。この二つの道德意識は、いずれも他を俟たずには存在することができぬのである」<sup>(20)</sup> という Durkheim の言葉は、ここに最も適切なものであらう。即ち一に於ける發生条件はそのまま他に於ける發生条件なのである。現代社会を特質づける数多くの問題の逸脱行動は、かくして、急速な文化變動や社会進歩の不可避的な代償と云えないであらうか。人は會つて唯一のものとしてすがつていた過去の重い絆から解き放たれて自由になつた。個人は、自らの自発性に於て行動し得、又行動しなければならぬ。彼は選択すべき、あるいは獲得すべき多くを、競い争い、為すべき多くを与えられているのである。ある個人又は集団をとらえた新しい規準のあるものは、世の支配的規準たらんとして他の諸規準と争うであらう。この場合、個々人でなく、むしろ集団と集団、階級と階級が争うのである。<sup>(21)</sup> 一方、個人は分立した諸規準のただ中にあつて、自身を調整しつつ、多くの他の競争者と共に社会的地位へのためまざる斗争を続

## 行動規準と逸脱行動

けなければならぬのである。かくて、時代の水準以上の、あるいは以下の種々なる逸脱は、こうした現代社会の競争的秩序に対する個人の一つの適合様式として不可避免的に現われるものと考えられるのである。

以上に於て、吾々は、社会病理学に於て基礎的概念と云える逸脱行動を、社会構造を組みあけている行動規準に関連せしめながら、その理論的整序を試みると共に、それによつて現代社会の構造と問題を簡単に考察してみた。

- (1) c. f. Bloch, Chap. 4, (4)
- (2) Samuel A. Stouffer, "An Analysis of Conflicting Social Norm", in *American Sociological Review* Vol. 14, 1949, December.
- (3) Bloch, op. cit., P. 577.
- (4) Davis, op. cit., PP. 275-76.  
これに関連して次のことが理解されねばならない。societal norms は ends となることによつてのみ行動に影響する力をもつ。即ち、それによつて norms はその背後に或る有機体的エネルギーを有するに至る。その ends は心の無意識の層に埋没せられ、そのフラストレーションは、より直接的に有機体的欲求に連結してゐる ends のフラストレーションと全く同じだけの緊張や不安を生じ得る。(Davis, op. cit., PP. 272-73)
- (5) Bloch は、現代青少年の多くの問題の現象は本質的にこうした地位の規定に関する混乱に基くものであると主張している。(c. f. op. cit., Chap. 7, 8.)
- (6) 例えば Davis は、親子は出産サイクルが運命づける不可避的な年齢差や個人の社会化又は社会的経験の著積の性格の故に、本来、相異つた特質を發展させるものであり、不可避的に斗争の可能性をはらむものであるが、今日の如くそれが著しく顕著する理由は、急速な社会変動、複雑な社会構造、文化における不統合という変数が加わる故であるとする。急速な社会変動は世代間の time interval に歴史的意味を含ませ、老若に異つた文化内容を与え、故に彼等は斗争的規準を所有するに至るだろう。しかも児童の社会化に義務や権利として両親に認められる權威は、かかる新情況に動揺しながらも活動し続けるなければならない、如何にしても児童の社会化はなされるべきものだからである。このことは子の有する規準と異つた規準が子に課せられることを意味する。その結果は生活の種々相における親子の斗争であり、特に重要なことは、家族というインティマートな小集団においては多く感情的緊張状態を生ぜしめ、家族解体の一つの要因を形成することである。(K. Davis, "The Sociology of Parent-Youth Conflict" in *American Sociological Review* Vol. 5, 1940 August, PP. 523-535) 同じく、性に関する地位の規定の混乱、夫婦の各々の文化的背景の相違は、夫婦間の斗争を導く潜勢力を準備してゐると云える。
- (7) Bloch, op. cit., Chap. 23.

- (8) Bloch. op. cit., P. 590.
- (9) Bloch. op. cit., P. 588.
- (10) Linton, op. cit., PP. 271-82.
- (11) *ibid.*, P. 283.
- (12) Linton' op. cit., P. 114.
- (13) Bennett & Tumin, op. cit., PP. 377-78.
- (14) Merton, op. cit., P. 127.
- (15) *ibid.*, P. 128.
- (16) *ibid.*, P. 137.
- (17) *ibid.*, PP. 134-146.
- (18) Bloch, op. cit., P. 64.
- (19) Linton, op. cit., P. 274 & P. 281.
- (20) Durkheim, op. cit., P. 169.
- (21) 親權が支配的規律たることを争う場合、それは、その権力を見出し得る最も適切な場として政治に集中するであらう。Bennett & Tumin は、経済、宗教、教育その他の現代の凡ゆる制度的生活が政治化 (politicalization) されること、かくて政治が、本来政治の圏外にある諸活動をもかゝる斗争に巻き込むように推進している。(op. cit., P. 381.)